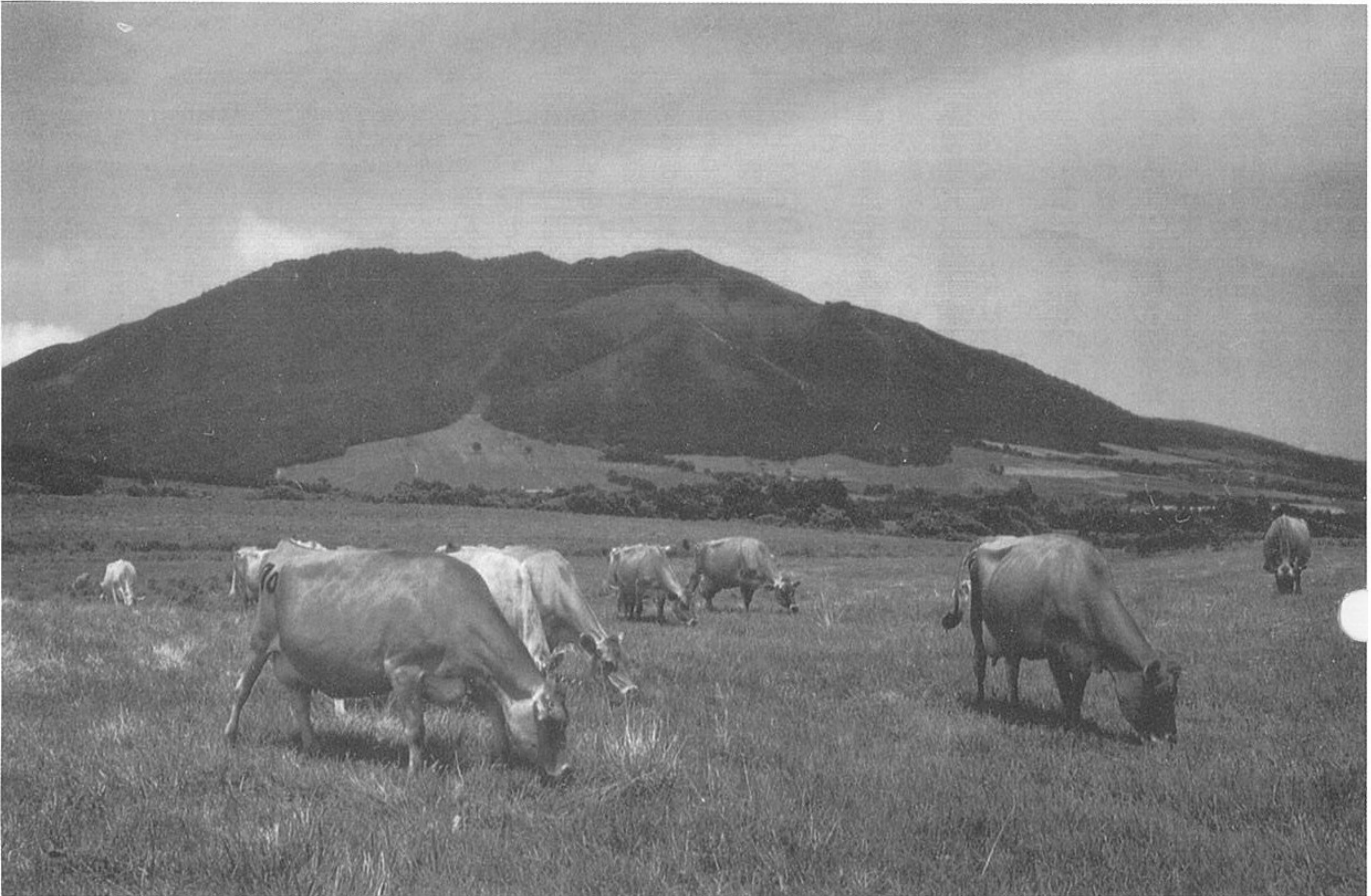


学 園

地方競馬益金事業

題 字 岡山県知事 長野 士郎
昭和63年1月1日発行
財団法人
中国四国酪農大学校
電話(0867)66-3651

だ よ り



も く じ

- 巻頭言
最近の酪農事情から
校長 石田正之…2
- 我家の酪農経営
第五期生
松崎 隆…3
- 海外研修に参加して
小林正雄…4
長田賢一…5
- 第一牧場だより…6
- 第二牧場だより…7
- 教務課だより…8
- 卒業者名簿…9
- 在校生名簿…10
- 人の動き…11
- 編集後記…11



最近の酪農事情から



校長 石田正之

卒業生の皆様には如何お暮らしですか。本年度は二年続きの減産計画の実施や、乳質規制、乳価の実質的な切り下げ等、酪農を取り巻く環境は厳しさを増しているといわざるを得ません。

しかし、昨年までの消費の停滞から、昨年九月以降引き続いて飲用乳の需要が伸びていることは、酪農関係者にとって大変結構なことだと思います。

本年度の生乳取引の中で特に目立ったことは、乳脂率の基準が、三・二%から三・五%へと変更になったことだと思います。

このことは従来はクリーム、バター用に調製されていた牛乳を、乳脂率表示のグレードアップによって、牛乳の消費拡大を図ろうとするものであります。

いままでは、乳脂率三・二%表示で無調製牛乳といっていたものが、実質的な牛乳の無調製時代に入ったといつて良

いと思います。

しかし、原料乳の月別の乳脂率を見ると、地域によって三・五%をクリアしてないため、飲用牛乳の表示も、三・四%以上となっているようです。

いずれにしてもこの三・五%基準は酪農家にとっては、避けて通れない道といえましよう。

乳脂率を左右する要因は、複雑で多方面にわたっているが、主なものは牛個体の要因としては、品種、個体、乳期ステージ、年齢と脂肪蓄積の程度、健康水準など、環境要因によるものとしては、季節による影響、栄養要因によるものとしては、繊維、脂肪、添加物など、搾乳管理によるものは、搾乳間隔、搾乳回数搾乳管理のやり方、また忘れてはならないのが、乳脂率の測定のための正しいサンプリングのやり方等、数え上げてみると多くのものがあります。これらの技術

体系的に検討し、この対策を立てなければなりません。

いまここで話題として取り上げたいのは、全国的なジャージー導入ブームの到来であります。

その中でも、ホルスタイン酪農家が、夏場の脂肪率低下対策として、ジャージー牛を求めていることとあります。

脂肪率アップの緊急対策として、導入を実施することを今少し詳しく検討してみますと、「一日当り二十kg産乳する乳牛を二十頭飼い日量四百kg生産している平均的な酪農家において、三・四%の脂肪率を三・五%に引き上げるには、四百gの脂肪を必要とする。これにジャージーを導入して、〇・一%引き上げるには、日量十kg産乳し、四・五%の脂肪率(ジャージー牛でも夏季には低下する。)のものも四頭導入しなければいけない。」

こうした小手先の飼い方で解決するだろうか。

ジャージー牛乳の市場での要求には異常と思えるものがあり、当大学校への原料乳として要望は、全国各地から後をたたないのが実状であります。このようなジャージー牛

乳が消費者のニーズに合い、全国的な稀少価値として見直されているとき、ジャージー資源の無駄としかいいようがないと思われまます。

基本的な乳脂肪率引き上げ対策の検討に、目を向けてもりたいと思います。

今一つ取り上げたい話題は牛乳の生産調整対策であります。最近の酪農雑誌に発表されております「北大の天間先生」「アメリカ飼料穀物協会の伊藤先生」の発言を借りますと、わが国で現在実施されている牛乳の生産調整対策は、二・三%という減産計画にかかわらず、強制的な生産割当方式をとったこととあります。

この一見非常に平等と思える仲良しクラブ的発想も、国際競争時代に向けてのわが国の酪農発展に対してマイナス要因を含んでいることとあります。生産調整として実施されている一律減産方式は、酪農業の活力を奪うもので、今後規模拡大しようとする若い人の意欲をつぶすマイナス効果があり、酪農業の活力が失われるのであります。

これによって、これから次の世代を担っていく若い人の他の産

を心配するものであります。

ここでアメリカの酪農計画を見ると、任意の生産調整を実施し、この計画は酪農に残るものが、やめていくものに補償を払う「とも補償」による酪農廃業計画を基本としております。他方では新規参入や規模拡大を禁止していないもので、一寸考えると矛盾した計画と思えます。

しかし、これは酪農産業の将来の酪農産業を考えた、活力を失わせたくないというねらいを持った、将来的展望のある政策といえます。

アメリカで行われている、この自由な発想は、農業者を一人前の経営者として扱っているもので、日本の伝統的な強制割当による生産調整は、農業者を一人前に見ていないものであります。

自らの経営判断に基づいて営農しようとする酪農家であれば、従来の「仲良しクラブ的減産方式」を検討し、活力ある酪農業発展のため、いま立ち上がるべきがきていると考えられます。

以上、少し固苦しい話題となりましたが、皆様の御活躍をお祈りしております。

我家の酪農経営

第五期生

松崎 隆

一、酪農への動機

我が国が戦後の混乱が終わわり高度経済成長に移りつつあるころ、父は、米麦だけに依存した農業経営では将来発展性がないと、昭和三四年一頭の乳牛を導入した。

その後数々の失敗をくりかえしながらも順調に乳牛頭数が増え、また生産された牛乳は、食生活の改善、牛乳消費拡大等に支えられるなど、酪農経営は米につづく安定作目の柱として、家の経済を支えてきた。

このような、前向きで農業に取り組む父母の姿勢を見て育った私は、知らない間に我家の農業に溶け込んでいた。

しかし、知識、技術は出来るだけ習得しなければ、新しい時代に対応出来る農業に成らないと考え、将来、酪農家として生きていくために必要な人材を養成する、中国四国酪農大学校に入学した。

在学中は、我家の将来構想をえがきながら、勉強に実習

にと励んだ。二年間の月日のたつのは早く、夢と希望に燃えて入学した酪農大学校も昭和四六年第五期生として卒業した。

二、経営発展の経過

(1) 施設器具の充実

昭和四六年学校を卒業と同時に、農業改良資金、部門開始資金を借り入れ、モーター、バキュームカーなどを導入した。

四八年には環境整備資金と農業後継者部門拡大資金を利用して、新しい牛舎を建設した。

五二年には、地力培養事業を導入して、同志六戸で牛糞処理乾燥施設を建設した。

(費用一、五〇〇万円)

五六年稲作転換特別対策促進事業を導入してサイロ三〇

m²四基、一〇m²八基、トラクター、ハーベスター、ブロアー、ベーター、スーパーカー

ワゴン、など飼料栽培、収穫調製、貯蔵に必要な機械、施設を取得した。

(費用一、九〇〇万円)

(2) 経営の変遷

昭和四六年に引き継いだ酪農は図表のとおりである。

三、経営の特徴

(1) 複合経営

我家の経営は水田酪農であり、乳牛と稲と二本の柱で進んでいる。

水田二haの内、稲を一二〇a、残り八〇aを飼料作物とし、裏作には全面積にイタリアンを栽培している。

また、請負耕作の二・三haには稲を作っている。

そのほか、飼料の自給率を高めるために、個人借地の五a、共同借地一・六haに飼料を栽培している。

(2) 共同作業

個人の力には限界があり、自給飼料をより多く生産するために、有志四人による共同作業をしている。

地域の人々との話し合いにより、水田転換畑の借入、麦作後地の借入等を行ない、これらの土地から生産された飼

料作物は、刈取り、運搬、サイロ詰めを共同作業により行ない利用も共同で行なっている。

る。

また、藁集めも重要な仕事であり、四〇haの稲藁を毎年集めているが、これも共同作業が中心となっている。

四、信条と今後の方向

(1) 生産性の向上に努める

自由経済社会の中に伍して行くためには、農産物も例外ではなく、今後外国からの圧力も強くなって来ると思われる。

これらに対抗するためには生産性を向上し、経営体質を強化しなければならない。

(2) 所得の向上を図る

よりよい生活を求めるためには、所得がなくては無理であり、無駄な投資はさけ、効率のよい儲かる酪農へと脱皮する。

(3) 稲作転換の有効利用

今後の稲転は今迄以上となることが予想されるため、これを逆手に取って、安い飼料

を出せるだけでなく作り、自給率の向上を図る。

(4) 環境問題について

近年当地域も、徐々に都

市化の波が寄せて来ているため乳牛の飼育環境も徐々に悪くなるのが予想されるが、同志と連携を取りながら、よりよい飼育環境になるよう努力する。

(5) 生活と後継者

昭和四七年に結婚、四八年に長男、四九年に長女が生まれた。

長男は現在、中学校一年生であるが、今迄家を継ぐよう強制した事はない。

しかし、大きくなったら何をするかと聞くと、長男は牛を飼うという。長女は、大きな酪農家のお嫁さんになるという。まだ若いので、このようになると断言出来ないが、酪農がいやとは子供は考えていないようだ。

子は親を見て育つといわれているが、自分は何の苦痛も無く農業を引き継いだ。これら後継者がよることで農業を引き継いで行く事が出来るように次ぎの事に意を払いたいと思う。

一、時代に対応出来る経営の土台作り

二、忙しい中にも余暇を作り家族楽しい生活

三、自分の仕事に夢と誇りを持つこと

海外実習報告

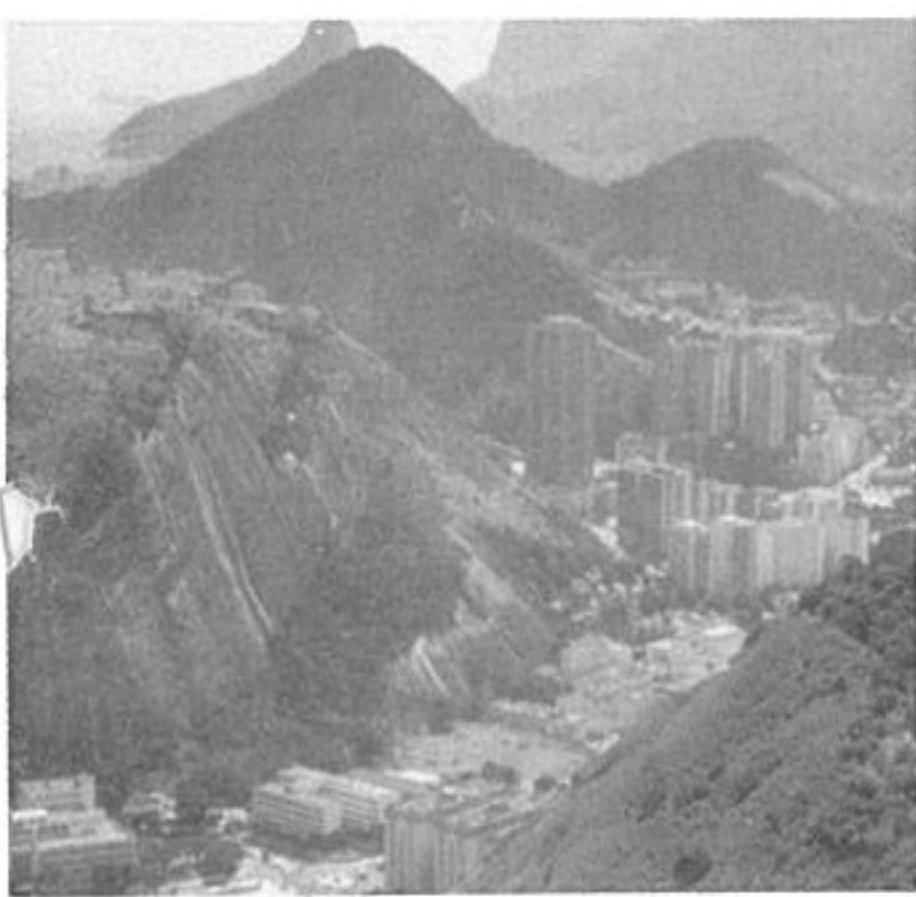
ブラジル国派遣 実習に参加して



第22期生
小林 正 雄

校外実習として、岡山県ブラジル国派遣実習に参加しましたのでそれについて書きま

す。
○ ブラジルは、熱帯、亜熱帯地域の北緯五度から南緯三十五度に位置し、首都ブラジリアを中心に、自治権を有する二十三の州と一連邦区及び三直轄区より成り、三権分立政を採用した連邦政治をして



います。

経済的には、一昨年はインフレ率が年間三百%ぐらいの超インフレ状態でしたが、滞在中の四月は、二十〜三十%でまあまあ落ち着いていた状態でした。

○ ブラジルでの実習内容と感想

一、グランジャ水本
ここは賀陽町出身の水本彰さんが四十年ぐらい前に養鶏を始め現在は息子の裕さんの経営になっています。

ここでは、破卵を選別したり給餌機の組み立てなどの実習をしました。

ブラジルでは日本国内に比べて人件費が安いいためほとんど機械化されていないのが普通ですが、この水本養鶏場は南米一だけあって、日本で使

っている給餌機をブラジル式に改良して自家生産したり、鶏舎などの建設用木材加工から組み立てや鶏を入れる籠、卵をいれる籠を場内で組み立てたり、機械類の修理もほとんど場内ですというよう

な自分で出来るものは自分の所ですという考え方をしていました。

二、土井農場

土井農場は、肥育、養豚、

ジャガイモ栽培が行なわれていました。特に豚の飼養管理を実習しました。

土井さんはとても研究熱心で、豚舎に自然流下式のような糞尿処理施設や飼料を作る機械を自分で考えて作られていたのが凄いなと思いました。

三、安田牧場

安田牧場は、肥育、ダイズ、トウモロコシ、カボチャを栽培していました。

ここでは、コンバインの刈り取り部の付替やカボチャの収穫などをしました。

安田さんは、カボチャやダイズ栽培に工夫を凝らされているほか、肥育牛としてゼブーにアバーディンアンガスを掛け合わせたものを使うなどの工夫をされていました。

四、大塚養鶏場

大塚さんは勝山町出身で十萬羽ぐらいの養鶏をされていました。

大塚さんの養鶏場は小さいながらもそれなりの経営をされていますが、それよりも

この養鶏場のあるガタパラ移住地は、日本人だけの移住地のため日本語それも各県の方

言で話しをしているといったところでした。

五、ムンドノー農場

ここでは、豚、肥育牛の飼養管理とコーヒーの木への追肥や、植え直しを実習しました。

この山口社長は、これまでの四人と少し違い日本などの新しい技術を経営に取り入れるのではなく、今までのままでいいというような考え方をされていました。

○ ブラジルの畜産

ブラジルの畜産は、日本国内では考えられないような規模や経営方針での経営をしています。

まず養鶏ですが、日本と同じようにケージ飼いでしたが一鶏舎四〜五千羽から二万五千羽が普通で最大のもは二階建てで五萬羽のものがありました。

羽数は十萬羽ぐらいの経営が多く、最大はグランジャ水本の四百万羽でした。

ほとんどの養鶏場が機械などを使わずに人力でやっていました。

養豚は日本と同じように舎内で飼育していましたが、規模的には数千頭の経営をしていました。

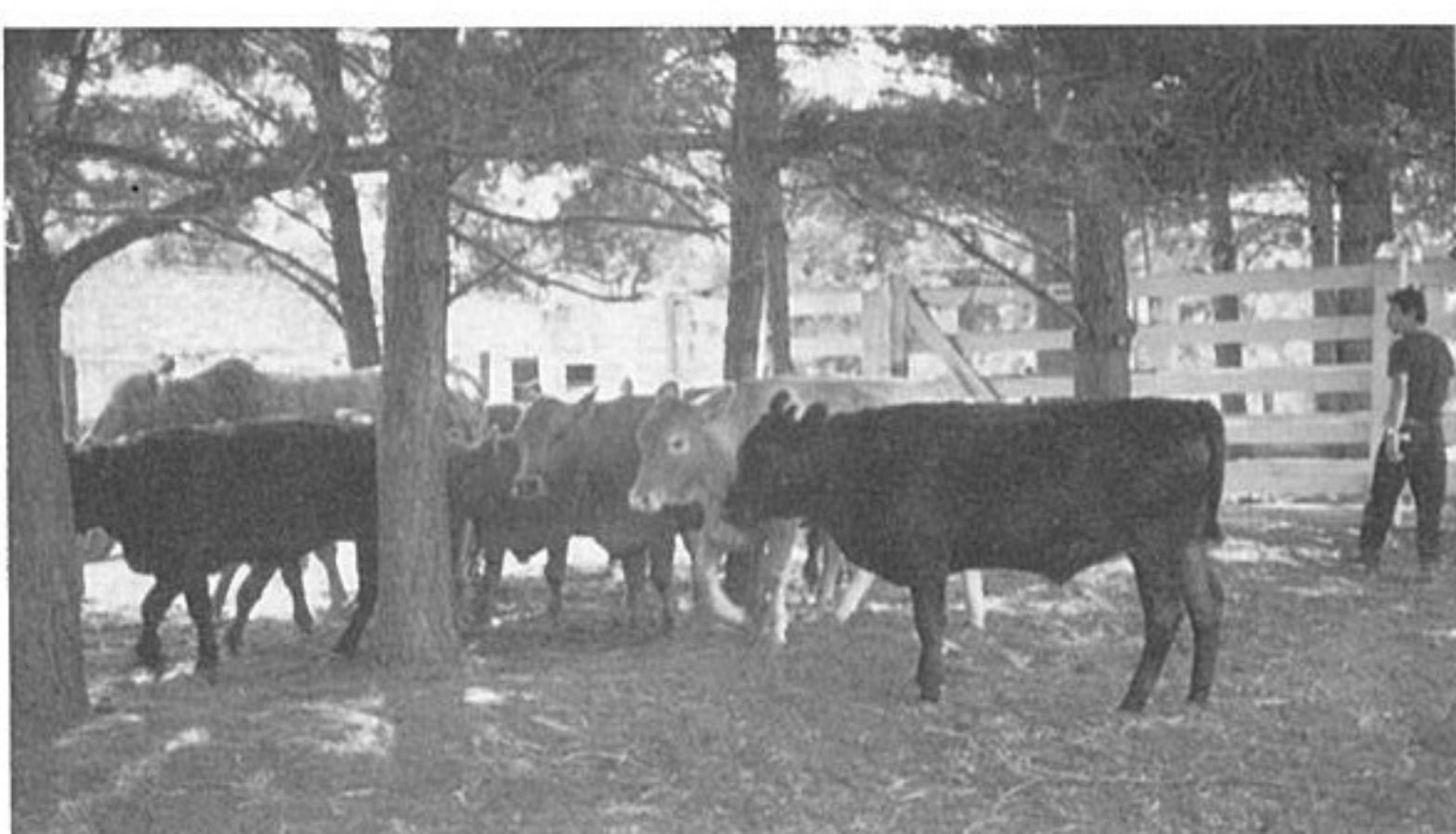
肥育、日本とは全く違い放

牧管理で、規模的には数千から数万頭でした。

ここでは自然繁殖が多く用いられた牛は資産であり生産にはあまり金を使わないということでした。

最後に酪農ですが、日系人でしている人に会わなかったのはびっくりしたことは言えませんが、牛乳は買う物ではなく作る物とのことで肥育牛から自家消費分だけを搾っているのが普通のような感じでした。

しかし、都市近郊では生産が消費に追いつかないというのが現状でチケット販売も行なわれていました。



ブラジルの生活



第23期生
長 田 賢 市

日系人の家では、朝食はパンとコーヒーで、昼食と夕食は米や肉を食べる。

肉牛のセブ種やネロ種のコブの肉は、脂肪分があつて柔らかくておいしいと聞いていたので、味わってみたけれど、魚のようにボロツとくだけ、コン・ビーフのようなものだった。

ほかに、ポテトサラダやタマネギ・ピーマン・タピオカといった肉と一緒に食べるもの、フェンジョンという御飯に豆をかける料理もあつた。ブラジル人は、食事の量が多いそうである。

日本食の方は、味噌汁から漬物、梅干というように何でも揃っていて、その上寿司や刺身、わさびまであつた。ブラジル人は、コーヒーをお茶と同じような感じで、小さなカップに入れて飲む。

コーヒーの味は日本のインスタントや豆をこして飲むものと違って、コーヒーの香りはするが、砂糖水のような甘い味である。

昭和六十年は、四十年ぶりの干ばつでも暑く、コーヒーの実があまりつかなかつたようである。

マリंगाの三沢コーヒー園では、百二十haに十五万本の木を植え収穫時には二百人以上の人手を使う。

機械で収穫すると木が傷むし、機械を買うより二百人の労賃の方が安いということである。

大量に雇っても一人一日四百円ぐらいで働いてくれるそうだ。

ブラジルの通貨は、クロゼイロ(Cr\$)という単位で今回は、一円が六十Cr\$の割合で両替ができたが、前回



の派遣団の人達は一円が十二Cr\$だったと聞く。

このようにひどいインフレで、月に十五%、年に二百%以上になるといふことである。

タクシー料金もインフレのためよく変動するためメーターをなおさずに別に表があるそうである。「インフレについてどう思いますか?」という質問に「びっくりする程すごいよ。」「まあ、その分もうかるけど:」という返答でなるほどと思った。

お世話になった家には、今は使えなくなったコイン十・二十・五十Cr\$がたくさんあつた。ジュース一本が四千Cr\$する。五百円ぐらいの大きさのコインが百枚ぐらい必要である。

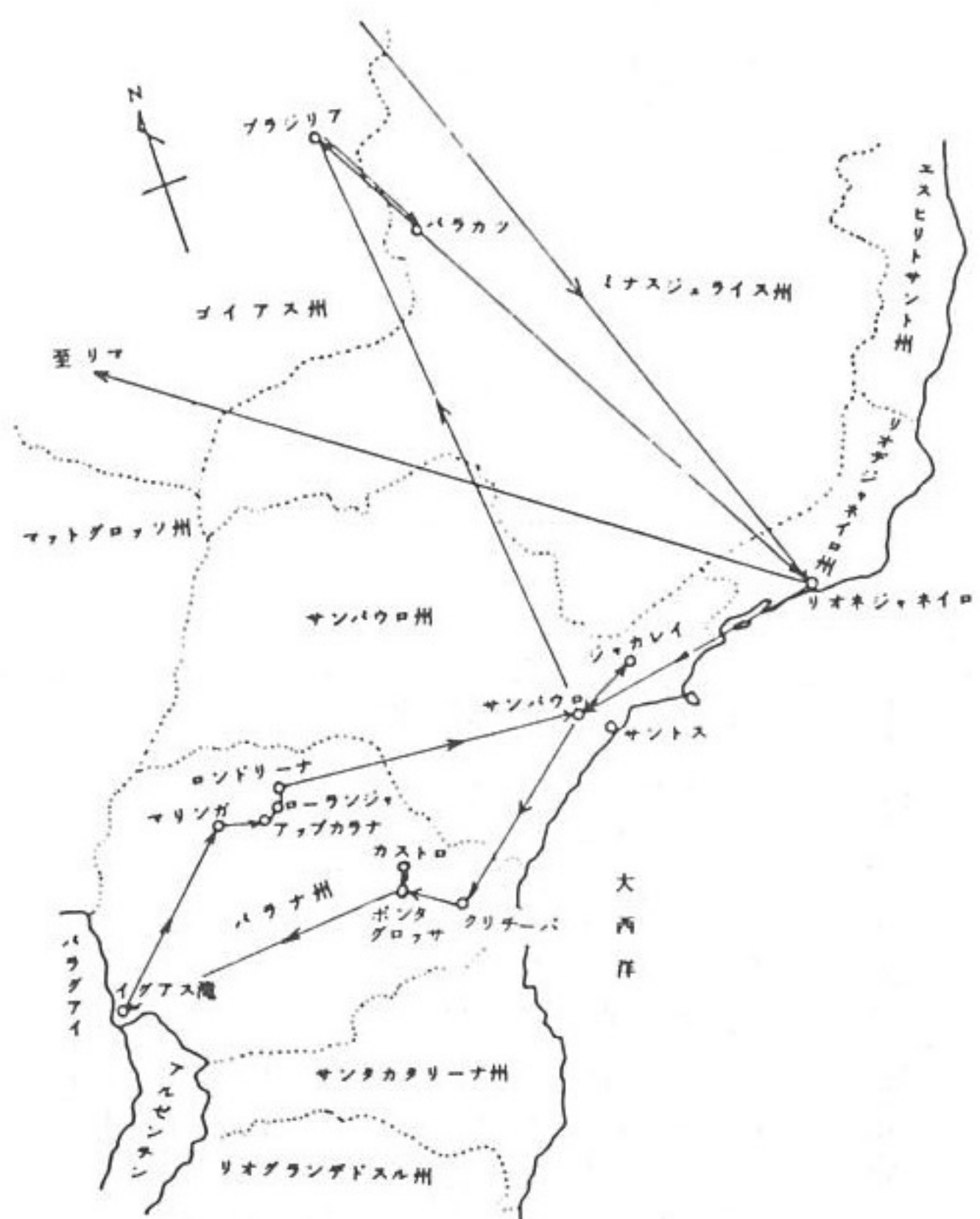
もし、そのコインが使えるなら、ジュース一本買うだけでも重たくて大変である。

紙幣も私達が両替してもらつたのはきれいだったけれどおつりの中には「こんなのが使われるのかな?」と思うくらい汚れていたものもあつた。

紙幣の大きさはみんな同じで、お金の価値というものが良く分からなかつた。

ブラジルの国語は、ポルトガル語で、二回の講習会であ

ブラジル国内での行動圏図



いさつなど、日常使う言葉を習って自分でも少し勉強したけれども、いざその場になると言葉が出なかつた。

マノエルリバス農高で、農場見学、サッカーの親善試合、歓迎昼食会などがあり、そこでポルトガル語に触れる機会があつた。

“Do you speak English?”と英語で話しかけられたが、こちらの英語力が向うの人と同程度なので“ Oh, no” “Judo” “Karate” など単語と身振り手

振りで何とか通じた。こんな調子で言葉は十分通じなかつたけれども、仲良くなれて楽しく過ごせた。

手紙を書くことになり、住所を書いてもらったが変わった字というか、癖字なのか、読みにくい字が少しあつた。英語もあまり出来ないのにポルトガル語なんてより難しい。

「もう少し勉強していれば」というのが今の気持である。

第1牧場だより



卒業生の皆さん、お元気で
お過ごしですか。

昭和六十一年度は例年にな
く雪が少なく、本年になって
春期の天候も比較的良好で、
飼料畑のトウモロコシの生育
もまずまずですが、八月、九
月の天候がきわめて不順で、
乾草、サイレージの調製に難
儀をしています。

さて、第一牧場の現況です
が四月の職員異動で森本場長
が第二牧場の場長となり、後
任として北村が転入してきま
した。

ベテランの馬場先生、樋口
先生と三人教務課の協力を得
ながら頑張っています。

写真右から樋口、北村、馬
場です。

お近くにおいでの際は気軽
にお立寄り下さい。

○飼養状況
昭和六十二年八月一日現在



の第一牧場での飼養頭数は、
表一に示しているように、成
牛二十八頭、育成牛十一頭、
肥育牛二十頭、飼い直し三頭
の合計八十二頭となっています。

過去三年間の乳用牛飼養状
況を表二に示しましたが、六
十一年度は前年に比較して、
平均産次数、平均年齢ともに
小さくなっており、また、表
三に示すように昭和六十二年
八月一日現在で三産までの牛
が全体の七十五%を占め、牛
群の若返りが進んでいます。

○生乳生産状況
月別の生乳生産状況を表四
に示しました。

昭和六十一年度より生乳生
産量の減産割当が実施された
ため、生乳生産量は二十万六
千二百十八kgとなりました。

昭和六十二年度はさらに厳
しい割当量となっており、今

表1 飼養頭数 62.8.1現在

区分	成牛				育成牛				飼直し	合計
	搾乳牛	乾乳牛	小計	未経産牛(19以上)	12ヶ月	6ヶ月	6ヶ月未満	小計		
雌	25	3	28	11	7	7	6	20	3	62
雄	-	-	-	3	11	3	3	17	-	20
計	25	3	28	14	18	10	9	37	3	82

表2 乳用牛飼養状況

項目	年次		
	59	60	61
平均産次	33.6	34.9	33.7
搾乳牛頭数	28.2	30.9	29.3
年令	4才11月	5才1月	4才10月
産次	3.4	3.5	3.4
分娩間隔	411	425	418
乾乳日数	74	64	62
初産年令	2才4月	2才2月	2才2月

表3 産次の飼養頭数 62.8.1現在

産次	1	2	3	4	5	6	7	計
頭数	10	7	4	1	3	2	1	28
比率	35.7	25.0	14.3	3.6	10.7	7.1	3.6	100

表4 月別生乳生産状況 (kg、%)

区分	月別												計・平均	
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
総乳量	60年度	20,063	20,879	17,756	18,362	18,492	16,836	18,788	18,140	16,657	15,636	12,928	15,669	210,207
	61年度	18,125	20,072	18,636	18,591	19,232	17,588	15,600	16,159	16,811	17,190	13,619	14,597	206,218
	前年比	90.3	96.1	105.0	101.2	104.0	104.5	83.0	89.1	100.9	109.9	105.3	93.2	98.1
一日平均乳量	60年度	20.2	21.6	20.8	20.2	19.8	18.0	18.4	19.0	17.1	17.0	16.6	18.2	18.9
	61年度	19.6	22.4	20.7	19.3	20.2	20.7	18.7	18.1	17.2	17.0	17.0	17.4	19.0
	前年比	97.0	103.7	99.5	95.5	102.0	115.0	101.6	95.3	100.6	100.0	102.4	95.6	100.5

表6 個体別乳量頭数

乳量	年次		
	59	60	61
8,000以上	1	2	6
7,000~8,000未満	3	6	6
6,000~7,000 "	8	10	5
5,000~6,000 "	9	3	3
5,000未満	5	3	2
計	26	24	22

表5 生乳生産成績 (kg)

項目	年次		
	59	60	61
総乳量	199,513	215,255	220,699
経産牛1頭当り乳量	5,939	6,172	6,555
搾乳牛1頭当り乳量	7,076	6,962	7,528
総乳脂量	7,102	8,078	8,223

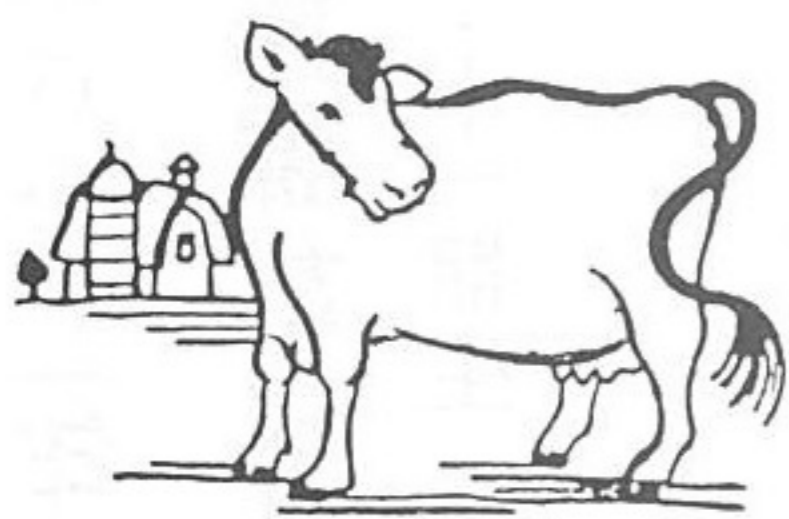
六千kg以上の頭数が十七頭(七十七%)で特に八千kg以上が六頭(二十七%)と牛群の改良が進んでいます。

生乳に関しては本年度より脂肪率の取引基準が三・五%となり、前述の計画生産の実施ともあわせて生乳生産も量から質の時代になろうとしています。

以上、第一牧場の近況をお知らせします。

最後に卒業生の皆様の健康と一層の御活躍をお祈りします。

第2牧場だより



卒業生の皆様 お元気でし
ようか。

第二牧場では、職員異動で
草刈場長が勝英地方振興局へ
転勤となり、後任として森本
が第一牧場より配置され、昨
年同様頑張っていますので、
お近くにおいでの際は気軽に
お立寄り下さい。

○飼養状況

昭和六十二年四月一日現在
の飼養頭数は、表一のとおり
で、成牛九十七頭、育成牛三
十一頭、肥育牛十八頭の合計
百四十六頭となっています。
昭和六十一年度の年間成績
をみると、搾乳牛率八十三・
三%、平均産次三・八産、飼
料効果二・六%となっていま
す。

○生乳生産状況

牛群の年間成績を表二に示
しました。
総乳量三十三万四千kg、搾

乳牛一頭当り四千二百六十kg
脂肪率四・六六%となってい
ます。

昭和六十一年度は、生乳生
産量の割当制による計画生産
が実施されたこと、及び夏の
長雨による粗飼料生産、特に
トウモロコシの減収がありま
した。

しかし、成績はまずまずだ
ったと思われます。

○受精卵移植について

現在、ジャージー牛に和牛
凍結受精卵の移植が五頭成功
し三頭の仔牛が生産され、今
年中に二頭の分娩を予定して
います。

ホルスタイン種に比べ、ジ
ャージー牛は種雄牛頭数が少
なく、近親交配による能力の
退化現象に直面してきており、
輸入精液の利用と高能力なジ
ャージー牛よりの採卵を試み、
ジャージー牛の改良を進めて
いきたいと考えています。

表2 牛群検定年間成績 (昭和61年)

平均経産牛数	92.5頭
平均搾乳牛数	77.1頭
総乳量	336,409kg
経産牛1頭当り乳量	3,638kg
搾乳牛1頭当り乳量	4,361kg
総乳脂量	15,680kg
平均乾乳日数	63日
平均分娩間隔	339日
平均初産年令	2才1月
平均年令	5才3月
平均産次	3.8産

表1 ジャージー牛飼養頭数 (S62.4.1現在)

区 分	成 牛				育 成 牛				合 計
	搾乳牛	乾乳牛	未産経牛	小計	12ヶ月以上	6ヶ月12ヶ月	6ヶ月未満	小計	
雌	80	7	10	97	11	12	8	31	128
雄									18
計	80	7	10	97					146

○肥育牛の状況

ジャージー肥育牛部門の増
収のため、和牛とのF1を肥
育牛として利用しています。
昭和六十二年四月一日現在
で十八頭中六頭(三十%)が
F1であり、今後のF1の増
体率、肉質等の成績によって
増頭を予定し、その成績に期
待している所です。

最後に場員の紹介をします。

○森本博之

明日の活気にピンとカラク
ち酒一杯、土帰月来の二児の
父。

○権代将人

種付けの極意は雌雄の生み
分け。昨年長男誕生に成功。
次は、ETで。

○木曾田 繁

パーラー担当で乳量増産に
意欲を燃やし、コンピュータ
にて花嫁検索中。

○三牧孝徳

ジャージー飼育では誰にも
まけない酪大二十二年目のオ
ーソリティー。
仕事一筋、酒一升。

○磯田 博

新婚一年目、今年の暑さは
格別とか。二世誕生も間近か
ではないかと推察。

○有富 勝仁

酪大三年目。肥育牛管理に
意欲を燃やす二牧の後継者。
村内外を問わず花嫁募集中。



左から、木曾田、権代、有富、森本、磯田、三牧です。

昭和六十一年

教務課だより

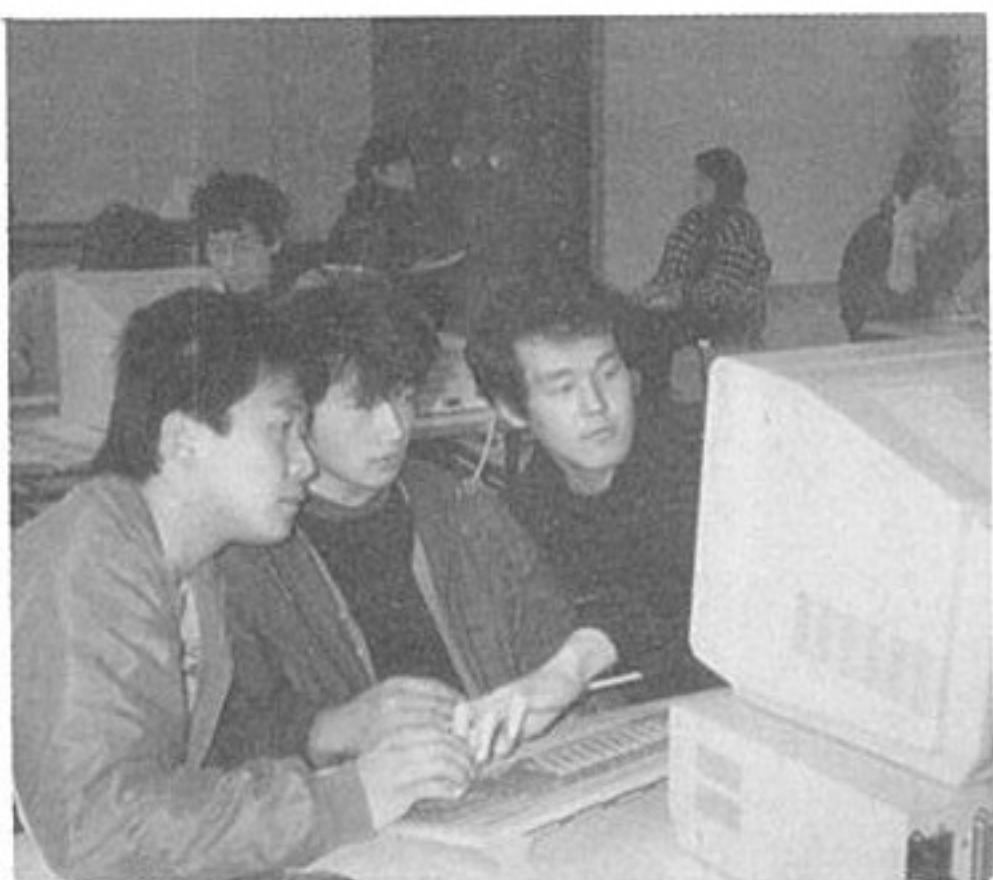
第二十一期生

二月二十六日

パソコン操作。

パソコンの基礎的な操作方
法について学んだ。

初めはぎこちなかった学生
も、最後には基礎的な飼料計
算プログラムを作成できるよ
うになった。



三月十三日

特別講義(乳製品)

酪農試験場から講師を招き
ヨーグルトの作成演習を行な
った。

学生全員で試食をしたが、
その日から毎日ヨーグルトを
作る学生もいたとか。

三月二十七日

卒業証書授与式

第二十一期生十八名が夢と
希望に燃えて、巣立っていっ
た。



第二十三期生

四月七日

第二十二期生の入学式挙
行。二十一名(うち女性二名)
が、酪農に胸をふくらませ、
多数の来賓の方から祝福を受
け入学した。

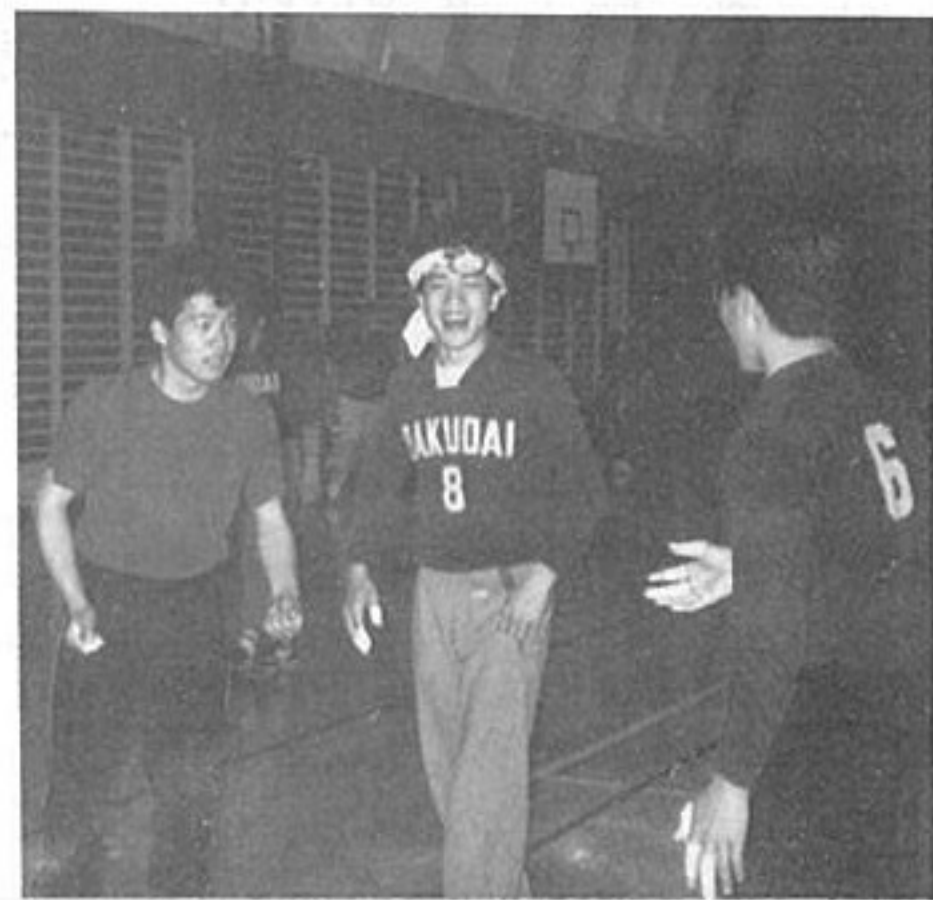
四月十四日

校内球技大会開催。職員と
学生相互の親睦を図るため、
ソフトボール大会を開催した。
連続する失策とヤジに明るい
笑い声がこだました。

五月一日

地区バレーボール準優勝。

蒜山体協のバレーボール大
会に参加し、勝率では同率一
位であったが、得失点差によ
り準優勝に泣いた。



五月七日

蒜山登山。

快適な登山日和であったが、
重力に耐え切れずグロッキー
になる者もいた。



七月三十日・三十一日

トラクター試験受験。

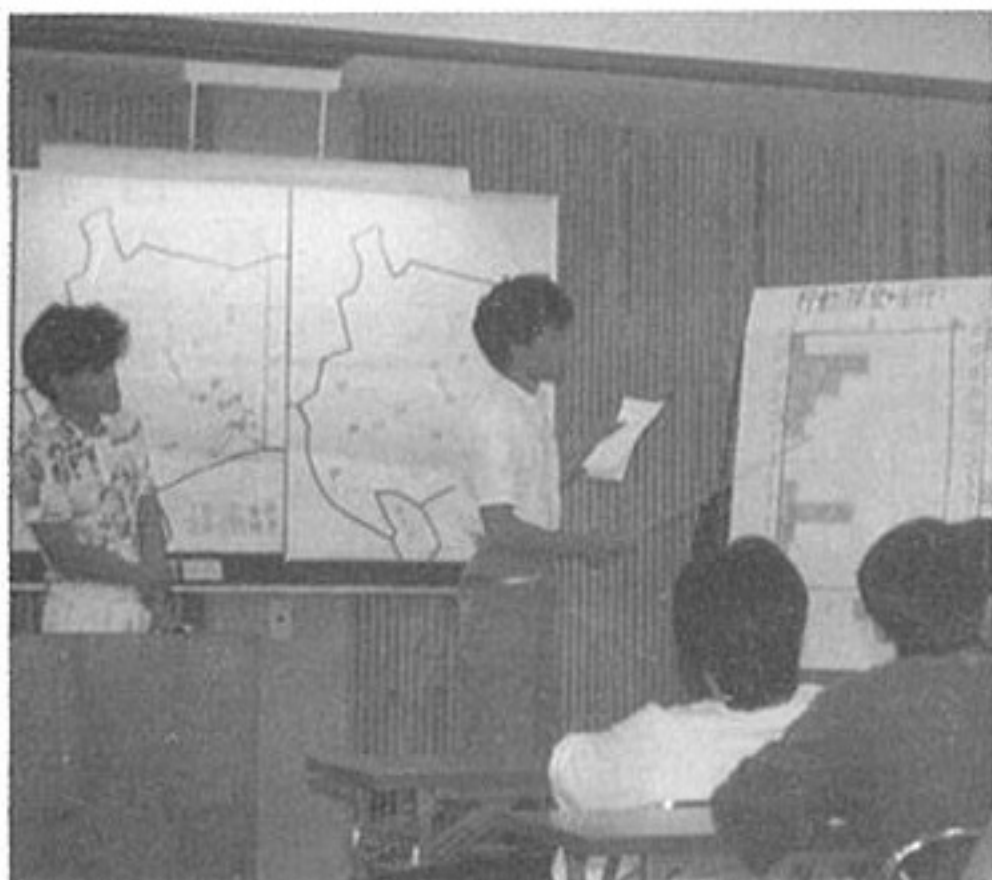
連日の練習の甲斐あって、
既に免許を取得していた四名
を除く十五名が合格した。



九月二日・三日

乳牛動態調査を第一牧場第
四牧区で実施した。

十四日には発表会を行ない、
牛の行動、生理について理解
を深めた。



九月

第一、第二牧場でトウモロ
コシのサイロ詰め作業。

可愛い牛たちのため全員
汗まみれになりながらサイロ
詰めを行なった。



九月三十日

第二十三期生前期終業式。

北は北海道から、南は高知
県までの全国各地の酪農家へ
研修へ旅立つ。

第二十二期生

十月一日
後期始業式

一年間の研修を無事終えて、
第二十二期生の後期学習が始
まる。

十月二日

岡山県畜産共進会の見学。



十月二十九日

畜魂祭

学生、職員が出席して、家
畜の霊を祭った。



十一月十一日～十三日

修学旅行

鳥羽、名古屋方面へ二泊三
日のバス旅行。



十二月三日

トラクター牽引試験

岡山県運転免許試験場にて
十七名が受験し、視力検査で
落ちた一名を除く十六名が合
格した。

十二月十七日

家畜人工授精講習会開催。

十七名が明日の授精師をめ
ざして勉強に励んだ。

翌年の二月には受精卵移植
講習会も控えている。

昭和61年度第21期生卒業証書授与者名簿

人の動き

昭和六十二年四月一日付けの定期異動で、次のとおり諸先生の異動がありました。

転出者

総務部長 斉藤 俊之
転出先 高梁地方振興局
福祉部福祉課
生活保護係

第二牧場長 草刈 耕造
勝英地方振興局
畜産係

現職員名簿

(四月一日現在)

校長	石田 正之	次長	植木 富士男	(総務部)	総務部長	西平 佳明	
主事	片山 賢二	主事	津田 清子	主事	池田 富幸	調理技術員	道祖 夕カ
(教育部)	教育部長	重近 文男	(教務課)	技師	大塚 武宣	技師	秋山 俊彦
(第一牧場)	技師	北村 直起	技師	馬場 直誠	技師	馬場 直誠	

酪農大学校で利用している プログラム一覧表

	プログラム名	内 容
酪 農 関 係	酪農経営管理プログラム (ふりーすらんど)	個体管理、繁殖管理、飼料計算
	乳量グラフ解析プログラム	乳量グラフ解析
	飼料計算プログラム	飼料計算
	農業簿記、青色申告プログラム	仕訳から元帳、試算表、貸借対照表、損益計算書を作成する。
	気象プログラム	気象データの集計、作表、グラフの作図
そ の 他	回帰、相関プログラム	回帰、相関
	一太郎 花子 マルチプラン dBASE-III	ワードプロセッサ 図形プロセッサ 表計算 データベース

コンピュータ

情報

農業におけるコンピュータ利用の増大は目覚ましく、畜産分野でも経営管理など各方面においてコンピュータの導入が個別農家の段階まで及んできています。しかしながら、コンピュータを購入したからといってすぐに思うように動いてくれない。コンピュータは機械(ハードウェア)であって、プロ

グラム(ソフトウェア)がなければ、仕事に使用するにも何の役にも立ちません。酪農大学校も昭和六十年度にコンピュータを一台導入し、学生の操作実習、牧場の個体管理、繁殖管理、飼料計算の場で利用しています。現在利用しているプログラムは、左表のとおりですが、卒業生の皆さんのところで利用されているプログラムがあれば、ご連絡いただければ幸いです。

編集後記

卒業生の皆さん、お元気で御活躍のことと思います。今年の冬は、昨年に引き続き暖冬異変で、暖かい年の瀬を迎えています。

「学園だより」も本号で、十九号を発刊するはこびとなり、楽しく読んでいただけるところを念じて作成しました。これからも、学校と同窓生の連携を更に強めていきたいと考えております。

同窓会や同窓生の結婚の話、地域グループでの活動など、数多くの御寄稿、御意見をお寄せいただきました。ようお願い申し上げます。最後に、今回の「学園だより」の発刊が大変遅れたことをお詫び申し上げます。

